

優秀賞 受賞作品

炭坑節

宇田一紘

筑豊の遠賀川流域は川筋といわれ、大小の炭坑が数多くあった。だがすべての炭坑は閉山され、住む人々も散り散りになった。その炭坑を転々として少年時代を過ごした私は「川筋者」の端くれであり、「炭坑者」の末裔というわけだ。

月が 出た 出た

月が出た

と荒くれ男たちが銅鑼声を張り上げ、『炭坑節』を歌って酒を呑む姿を、よく見たものだ。幼い私が徳利を運ぶこともあった。と酔った男が盃を差し出してくる。酌をしてやると嬉しそうに呑み干してから、私の手に盃を握らせると酒を注いできた。返杯である。でもこの返杯を断ったりすると大変だ。男が、
「俺の盃ば受けられんちいとかッ！」と喰ってかかってくる。仕方なく、酒を呑むと、

「よか男たい！」

そう言つて、小遣いを握らせてくれることもあった。だから私は、いまや立派な呑ん兵衛である。酒の上の失敗は数限りなくある。でもそれを悔やんだりしない。

「川筋者は自分のやったことば、後でゴチャゴチャ言い訳せんとッ！」

男たちの口癖を胸中で嘯き、また酒を呑む。だが残念なのは『炭坑節』を聞く機会がないことだ。それに筑豊から、炭坑のシンボルともいべきボタ山がなくなつた。山の形はボタ山と同じ円錐形をしたものが残っているらしいが、それはボタ山と呼べない。

私の知っているボタ山は黒々と聳え、山頂が鋭く天を突き刺していた。だが円錐形の姿を残しているものは雑草や灌木で緑だったし、山頂も鋭さを失っている。それは猛獣が牙を奪われ、野性をなくしてしまったのを見せつけられるように寂しく、切ない。

「炭坑者にとつちや、ボタ山は金玉と同じたい。そればのうなしたら、どうもならんばい」と酔ったときには思う。そして寝転がり、

月が 出た 出た

月が出た

と胸中で、ひとり『炭坑節』を歌う。すると閉じた瞼の裏に、夕焼け空に黒々と聳え立つボタ山の勇姿が浮かび上がってくる。